



「散策のすすめ ～仮想と現実～」

県南教育事務所総務次長兼総務社会教育課長 馬目 常寿

プラ○モリ、○瓶の家族に乾杯、ローカル○線バス乗り継ぎの旅……、皆さんもいずれかはご覧になったテレビ番組ではないでしょうか。出演するタレントの個性的な人柄や軽妙な話術を用い、当地で出会った住民との他愛のない会話から、地域のスポットやおすすめグルメ情報などを見出ししていく手法が、視聴者の人気を集めています。多様な自然景観や、鎖国という世界史的にも稀な歴史を有する日本では、道端の石碑や石仏、地元信仰の寺社、ソウルフードや特産品など、各地独自の風習・伝統が色濃く残っていることがよくわかる番組です。

2019年、今やIT全盛期。スマートフォン一つで誰もが気軽に数千km離れたライブ映像を視聴できるのは素晴らしい“技術革新”である一方で、その情報の中身は“玉石混淆”となり、私たち受け手側が高い判断を求められているのも、また事実です。散歩番組の中で、見知らぬ者どうしの人間的な触れ合いが視聴者の心を和ませているのは、情報化の“アンチテーゼ”かもしれません。

当事務所では、小学生が各地域の伝統・文化・特産物等を学習・体験しながら、「郷土愛」を育む取組を支援しています。和太鼓演奏、祭事伝承、稲作・豆腐・そば・こんにやく・ダリヤ染め・木材細工・和紙体験など、

分野はさまざまですが、参加した児童が一様に目を輝かせていたことがとても印象に残りました。また、各市町村の公民館では、地元食材を使った料理教室、身近な歴史探訪ツアーなど、住民相互の交流や共通体験を伴う事業が多く受講者を集めています。その取組の一例として、泉崎村中央公民館が主催する事業を紹介します。ボランティア団体「鳥(からす)峠を守る会」の皆さんが引率役となり、地元の幼小中学生や保護者・教職員を、頂上にある「鳥峠稲荷神社」まで小1時間ほど案内するものです。登頂後は、カレーライスを食べたりゲームをしたり。この神社は、地元で「とうげさま」の愛称で古くから親しまれ、郷土の象徴的存在となっているのです。母親に手を引かれて自力で登頂した幼稚園児の脳裏に、“仮想”でない“現実”体験という真夏の良き思い出が強く刻まれていることを願っています。

地元の素晴らしさを再認識することは、現在の大人たちがどれだけ地域の良さを知り、若い世代に丁寧に伝えられるかに掛かっています。自身を含め、見聞を広めるための知識や経験を得る時間をできる限り費やしていきたいものです。この週末、“そうだ、図書館(公民館)に行こう”を合い言葉に、“散策”を兼ねて、気軽に多くの情報に触れられてはいかがでしょうか？

受賞おめでとうございます～平成30年度教育・文化関係表彰～

(敬称略)

- 叙勲
 - 春の叙勲(瑞宝双光章) 元白河市立白河第二小学校校長 藤田 克彦
 - 秋の叙勲(瑞宝双光章) 矢祭町学校歯科医 古張 武
- 文部科学大臣表彰
 - 第7回日本学校合奏コンクール2018全国大会ソロ&アンサンブルコンテスト アンサンブル部門 文部科学大臣賞 白河市立白河第一小学校 特設器楽クラブ おのだなかよし教室
 - 「地域学校協働活動」推進に係る文部科学大臣表彰
 - 優良PTA文部科学大臣表彰 棚倉町立棚倉幼稚園父母と教師の会
 - 地方教育行政功労者表彰 元中島村教育委員会教育長 佐藤 正敏
 - 元中島村教育委員会教育委員 片野 宗和
 - 矢祭町教育委員会教育委員 前林 伸也
 - 優秀教職員表彰 中島村立滑津小学校教諭 齋藤 美佳子
 - 棚倉町立社川小学校教諭 加藤 真理子
 - 白河市立表郷中学校教諭 安齋 宏
 - 中島村立中島中学校教諭
- 日本学校保健会表彰
 - 全国健康づくり推進学校優良校 鮫川村立鮫川小学校
- 県教育委員会表彰
 - 社会教育功労者表彰 白河市社会教育委員 今野登志子
 - 学校教育功労者表彰 白河市立白河第一小学校校長 大杉 和規
 - 棚倉町立棚倉中学校校長 永山 美雄
 - 教育・文化特別功績表彰 白河市立白河第一小学校 特設器楽クラブ
 - 優秀教職員表彰 白河市立白河第三小学校教諭 江花 洋介
 - 西郷村立小田倉小学校教諭 鈴木恵美子
 - 永年勤続教職員表彰 小・中学校39名 県立学校17名
 - 教職員研究論文 入選 個人 中島村立滑津小学校養護教諭 黒羽 葵
 - 奨励賞 団体 塙町立塙小学校
 - ふくしまっ子体力向上優秀校 白河市立白河中央中学校
 - ふくしまっ子体力向上特別賞 中島村立中島中学校
 - ふくしまっ子元気大賞 塙町立塙小学校
- 食育推進優秀校表彰
 - 優秀賞 白河市立釜子小学校
 - 優良賞 白河市立大信中学校
- ふくしまっ子ごはんコンテスト学校賞
 - 西郷村立羽太小学校 塙町立笹原小学校
 - 白河市立白河中央中学校 西郷村立川谷中学校
 - 塙町立塙中学校
- なわとびコンテスト
 - 9人以下 高学年部門 第1位 白河市立大屋小学校 6年
 - 10～25人 低学年部門 第1位 塙町立塙小学校 2年1組
 - 26人以上 高学年部門 第1位 塙町立塙小学校 6年1組
- 県学校給食会表彰
 - 学校給食功労者 西郷村立西郷第一中学校(西郷村学校給食センター) 栄養教諭 田原智代子
- 県学校保健会表彰
 - 健康づくり推進学校 鮫川村立鮫川小学校
- 県学校歯科保健優良校表彰
 - 最優秀賞 西郷村立米小学校 西郷村立羽太小学校
 - 優秀賞 西郷村立小田倉小学校 鮫川村立鮫川小学校
 - 白河市立大信中学校
 - 努力賞 小・中学校、県立学校 6校
 - 奨励賞 小・中学校 4校
 - 優秀活動奨励賞 小学校 1校
- 福島県学校緑化コンクール表彰
 - 学校環境緑化の部 小学校部門 公益財団法人ふくしまフォレスト・エコ・ライフ財団理事賞 泉崎村立泉崎第二小学校
 - 奨励賞(公益財団法人福島県都市公園・緑化協会) 白河市立関辺小学校
- 福島県統計グラフコンクール表彰
 - 優秀学校賞 矢吹町立善郷小学校
- 算数ジュニアオリンピック
 - 特別賞 白河市立みさか小学校

夢と希望をはぐくむ県南の教育の推進 ～学校教育課 平成30年度事業の成果～

「道徳教育の充実と 教育相談体制の整備」

「特別の教科 道徳」の実施に向けた地区別研修会では、評価の在り方について、実際に文章表現の演習を行いました。また、中島村立吉子川小学校において道徳教育地区別推進協議会を実施し、道徳の授業を提供していただきました。各学校においては、各種訪問の際に道徳の授業をされる学校が増えてきています。

今後も「道徳の架け橋」「学校教育課通信」等で情報を発信していきますので、ぜひご活用ください。

また、不登校については、各学校において未然防止、早期・継続的な対応を懸命に行っているのにもかかわらず、増加している状況にあります。SC、SSWも含めた学校の一層の連携・協力した取組が必要となっています。その一助として「不登校対策資料 Vol. 5 豊かな学校生活のために ～チームで切れ目のない援助を～」に基づいた組織的な取組が大切であると考えています。

そこで、不登校・いじめ対策推進事業域別研修会や教育相談スキルアップ研修会では、不登校対応資料の中の「援助チームシート」の活用についてグループ演習を行ってきました。これらの研修に参加された先生方が各学校において、中心となって組織的対応を進めていくことが不登校の未然防止や早期対応に大切であると考えています。

「学級・授業づくり支援と 検証改善サイクルの確立」

今年度も多くの学校に訪問させていただき、研修に熱心に取り組む先生方と一緒に、授業づくりについて考える機会をいただきました。その中で、「確かな学力の向上」のために欠かせない二つの要素を再確認することができました。

一つは、学級集団の学びに向かう姿勢です。課題に対する自分の考えを、友だちに向かって話す姿。うなずいたり考え込んだりしながら、その言葉を聞いている姿。考えを交流させる中に生まれる「でもさ」「そうか」「なるほどね」などの、気づきや変容がうかがえる言葉の数々。そのような言葉の陰には「一人一人の気づきや理解の深まり」がありました。

もう一つは、授業改善に向けた指導技術向上のための共通実践です。「授業スタンダード」や各校で積み重ねてこられた学校課題研究から、共通実践事項を重点化して取り組むことにより、全員で自校の課題を共有しながら自分の取組を修正し、一人一人の指導技術を高めることが可能になると感じました。

学力向上マネジメントワークシートの自校化が図られ、取組の内容も具体的なものになってきています。今年度の研修の成果を、ぜひ次年度の学力向上マネジメントワークシートに反映していただければと思います。

「健康課題解決に向けた基盤づくり」

全国体力・運動能力調査の結果、県南域内では、下の表のとおり全国・県平均を上回ることができました。また、肥満傾向児出現率についても、小学男女、中学女子で改善が見られました。特に高度肥満が低下し、個別指導の取組が成果となって表れています。

全国体力・運動能力調査 合計得点の比較

	小学5年男子	小学5年女子
H30県南合計得点	54.50	57.50
全国得点/県南比較	54.21 0.29	55.90 1.60
県得点/県南比較	53.88 0.62	56.64 0.86
前年県南得点/比較	54.96 ▲0.46	57.06 0.44
	中学2年男子	中学2年女子
H30県南合計得点	42.27	51.02
全国得点/県南比較	42.18 0.09	50.43 0.59
県得点/県南比較	41.62 0.65	49.76 1.26
前年県南得点/比較	42.25 0.02	50.17 0.85

肥満傾向児出現率前年度との比較

	肥満傾向児 出現率
小学校男子	11.4
(前年比)	▲0.2
小学校女子	9.9
(前年比)	▲1.0
中学校男子	12.6
(前年比)	0.4
中学校女子	11.5
(前年比)	▲0.4

さて、今年度の全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書の『運動・食事・睡眠』の全てが大切だと思っている児童生徒の生活習慣と体力によると、「運動・食事・睡眠」の全てが大切だと思っている児童生徒は、規則正しい生活習慣を身に付け、自ら活発に運動しています。また、それらの児童生徒の割合が高い学校は、学校全体で組織的に取り組んでいる割合が高いという結果が出ています。

健康課題解決に向けた基盤づくりとして、学校全体で健康教育の充実を図るとともに、家庭を巻き込んだ取組をお願いします。

「特別支援教育の充実と 切れ目のない支援体制の整備」

特別支援教育に関する相談支援や研修支援の要請については、今年度より、「切れ目のない支援体制整備事業」という事業名で、特別支援学校のセンター的機能を活用した相談支援や研修支援を行いました。

特別支援学級の新設や増設、新任担当教員の増加により、特別支援教育の視点を取り入れたいという先生方や学校の思いに応えるため、また市町村教育委員会等からの相談内容やニーズに応じて、特別支援学校の教員を派遣しました。

西郷支援学校(知的)、石川支援学校(知的)、視覚支援学校、聴覚支援学校、郡山支援学校(肢体不自由)の教員、相談内容によっては、県南教育事務所や特別支援教育センターの指導主事が相談や指導助言を行いました。

内容は、障がいや病気により配慮が必要な幼児・児童・生徒の対応に関する助言や、「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の作成と活用のための支援、特別支援教育に関する教員の研修などです。

今後も、園や学校、市町村教育委員会における支援体制整備が進められるよう、取組が共有できる機会を設けていきたいと考えています。



地域学校協働本部事業（地域と学校が連携・協働）
～地域全体で子どもたちを育成する新たな体制づくり～

地域学校協働本部事業

○地域学校協働活動事業（県内8地区モデル事業）

県南域内では西郷村で実施しています。地域と学校が連携・協力し、放課後や長期休業の学習支援、小学校の運動会や村内一周駅伝のボランティア、文化センターの清掃活動、地域活動研修会などを行いました。



○学校支援活動事業

学校の要請に応じ地域の様々な人材をコーディネートし、学校を支援する活動を促進することで、地域全体で子どもたちを支える体制を構築しています。学校は必要に応じて支援（環境整備・地域交流・学習活動支援等）を要請しています。

○放課後子ども教室事業

小学生が安全に安心して活動できる放課後等の活動拠点をつくり、各教室では、コーディネーターを中心に、活動指導員と安全管理員が協力して体験活動・季節ごとの行事・学習支援などを行いました。

各種研修会等

○学校支援実践研修会(7/25)

各中学校区の教員と行政担当者が参加し、学校支援の課題や今後の方向について情報交換をしました。日頃、時間をとって話し合う機会も十分にとることができないので、ネットワークを広げる上でもとても好評でした。

○県南域内社会教育・文化施設情報交流会(12/11)

次年度から各学校では地域連携担当教職員が配置されるので、各市町村の担当者に、地域でもコーディネーターを設置していく必要性を説明しました。

○地域学校協働活動事業推進フォーラム(1/30)

地域連携担当教職員の役割や、先進地域のシステムについて研修を深めました。新年度からの体制づくりを進めていく上で、とても役立つ情報が満載でした。

○公民館訪問・社会教育研修会(5-12月)

各市町村では、地域コーディネーターを設置し、行政も支援体制を整えていくことを説明しました。

“ひがししらかわ”輝くふる郷体験事業

この事業は、地域の人材活用と体験活動の充実により、郷土を愛し、人と人、人と地域の絆を大切にする豊かで優しい心を育てることを目的としています。東白川郡内の9小学校で、農業・園芸体験、工芸品等制作体験、伝統文化継承体験などを行いました。



新年度から、各学校では地域連携担当教職員を配置し、学校と地域の連携・協働は加速していきます。今年度の成果により、各学校及び行政では新たなシステムを構築し、教育活動の充実や多忙化解消が図られていくことが期待されます。

小 学 校 紹 介

「ユニバーサルデザイン教育」

白河市立白河第五小学校

本校は、栃木県との県境に位置し、歴史的な奥州街道の境の明神、宿場町白坂宿、「まほろん」等歴史文化施設が学区内にあり、歴史を学ぶには絶好の場所です。児童数147名、学級数10学級と小規模な学校です。児童は明るく、学年の垣根を越え、みんな大変仲良しで元気いっぱいです。本校では、3年程前からユニバーサルデザイン教育を現職教育で研修しており、日常の教育活動で、一人一人の児童の特性に応じたきめ細かな教育の推進を図っています。さらに、今年から学力向上、心の教育、体力づくりのバランスを考えた教育に力を入れ、朝のマラソン活動、心の授業、はげみタイム、ぐんぐんタイムなどに日々取り組んでいます。また、同じ敷地内にある白坂幼稚園との多くの交流行事、白河南中学校との授業研究会、共通のPTA行事等を通して、幼小中連携を図っています。地域の方による読み聞かせ活動も充実し、学校、保護者、地域で子どもたちの教育を相互に育んでいます。



「へき地小規模校って面白い！！」

棚倉町立山岡小学校

本校は、全校児童22名のへき地小規模校です。「へき地」という言葉は、どうもマイナスのイメージが強くなりがちですが、決してそうではありません。むしろ、面白いことや可能性がいっぱいあります。その一端を紹介いたします。

1つ目は、地域密着の各種行事。さつまいもの苗植えやそばの種まき、新そば祭りや正月のしめ縄作り、ブルーベリーの収穫とジャム作りなど、地域の皆さんとの連携協力によって中身の濃い活動を行っています。子どもたちと地域の方々とは顔なじみで、地域ぐるみで子どもたちを育てていただいています。

2つ目は、学校と東京をオンラインでつないだ遠隔授業によるプログラミング教育の取組。テレビ画面を通して東京の専門家に「生活を豊かで便利にするアイデア」をプレゼンしたり、アドバイスをもらったりしながら、プログラミングを体験しました。夢や創造性を育み、職業選択のきっかけを作ることができました。技術の進歩によって都会との距離はどんどん小さくなっています。



今年度を振り返って



「二兎を追う者は 一兎をも得ず」

埴町立笹原小学校
校長 小野 一彦

「今日は1回も友達と遊ぶ時間がないんだ」「個別指導をする時間が取れません」いつから学校は、子どもたちから『遊ぶ時間』を奪い、教員が『子ども一人一人と接する時間』を無くしてしまったのでしょうか。

「〇〇教育や〇〇タイムは子どもたちのためだから」「他校でもやっているから」「地域との連携が大切だから」と、わたしたちが次々に増やしてきたのです。

自校に本当に必要なのですか？新採用増加、指導要領改訂の今こそピンチはチャンスです。内容を精選し、教育課程の授業に集中して、できてもやらない勇気を。



「つながりがある支援を めざして」

福島県立西郷支援学校
校長 曾川 孝規

本校では地域支援センター「にしの郷」を立ち上げ、特別支援学校のセンター的機能の充実を図っています。幼稚園・保育園、小・中学校、高等学校と特別支援学校の教員が、そして、地域の学校と、保健、福祉、労働、医療とがつながることで、地域における児童生徒の学習支援、生活支援の充実と、その充実に向けた地域での支援体制の構築を進めることが目的です。

この地域だからできる支援を、つながりがあるからこそできる支援を、児童生徒一人一人の豊かな成長のために、取り組んでいきたいと思えます。



「学校のコンシェルジュ として」

矢吹町立中畑小学校
教頭 宍戸 宏

朝、門扉を開けて本校のシンボリック的存在である孔雀のジャックに軽くあいさつをして機械警備を解除する、これが私の日課の始まりです。新任教頭として中畑小学校に赴任してから間もなく1年。戸惑うことも多く、校長先生をはじめとする多くの先生方に支えられながら過ごしてきました。先生方や子どもたちはもちろん、保護者や地域の方々と接する中で思うこと、それは自分が学校のコンシェルジュとして機能することの大切さです。どんな要望にも誠意をもって対応できるよう、今後も励みたいと思えます。ライバルはSiri！



「啐啄（そったく）」

福島県立光南高等学校
教頭 五十嵐 健博

新聞のアンケートで、高校の卒業式が校種別で最も思い出に残っているとの結果を目にしました。統計上高校への進学がほぼ全入となっている今、その卒業を自己実現の起点と位置づける方も多いのかもしれませんが。

本校に赴任して1年。卵殻を内側から必死に突くかのように受験対策や就職活動に励む3年生と、それに寄り添い指導に当たる先生方の姿を、校内随所で目にしてきました。アンケートの結果に高等学校の果たす役割の重さを再認識しつつ、朱雀たちが一斉に飛び立つ姿を見届けることができるこの職に、今歓びを感じています。



「1年間を振り返って」

福島県立白河高等学校
教諭 日出山 亜由子

1年間を振り返って、今年一番考えたこと、悩んだことは「授業について」でした。初任者研修で授業について学び、新しい発見を得られることの喜びと同時に、実際の授業でどのように生かそうかという悩みも生じました。1年間、試行錯誤を繰り返しましたが、この悩みは教員をしていく限り、ずっと続くのだと思えます。

高校生を見ていると、努力や心持ち次第で何にでもなれる、無限の可能性を感じます。そのような生徒たちの一助となれるよう、これからはずっと努力していきたいと思えます。



「1年間を振り返って」

福島県立西郷支援学校
教諭 藤森 理那

振り返るとあっという間に1年間が過ぎました。特別支援学校の教諭として新採用になり、子どもたちとのかわり方や、指導で悩んだ時もありました。しかし今では、子どもたちと日々の生活や行事を共に過ごしてきた中で楽しい、嬉しい思い出の方が多く思い出されます。それはきっと子どもたちの「できた、分かった」瞬間に、私も「できたね、分かったね」と共感し合うことが積み重なったからだと思います。これからは先生方から御指導、御助言をいただきながら、子どもたちに寄り添い、学び続ける姿勢を忘れない教員を目指していきたいです。